

高島春雄君の思い出

福 井 玉 夫



故高島春雄氏

昭和37年5月31日東邦大理学部の講義と実習をすませて帰つてくると、家へ入った途端家内が大変なことだという。何が大変だときくと高島さんが今朝なくなつたという。暫し呆然として立つていた。近年にないショックであつた。

何としても惜しい人を失つたものである。私は不思議な縁で同君とは長く親しい交際であつた。東京府立五中に在学中から静岡高等学校、東京文理科大学と続き、更に文理大の副手からあとずつと続いて凡そ40年近く親密にして頂いたのである。高島君は度々その達者な文章の中で、私を恩師と記して下さつたが、恩師らしいことを何もできなかつた私はいつもなんだかくすぐつたいような気持ちで読んでいた。併し私にとっては数ある愛弟子の優れた1人である。

高島君が研究に指導にまた、学会の世話役として稀に見る活躍を続けていたことは本誌の読者程の方々には周知のことと思われるが、全くよくやられたものだと思う。高等学校時代にすでに老成の風があつて、時々発表しておられたが、時にひよつこり私に亀鼈叢談・続亀鼈叢談等の別刷を渡して漂然として去られたが、読んで見ると実に興味深い記述で中々やるなと感心した次第であつた。今文献の中から引出して見ると昭和7年7月17日発行の静岡高の寮誌の別刷で、続いて亀に関するものが数冊ある。

高等学校を卒業して東京文理科大学へ入学されたのであるが、その頃私も静岡高から文理大へ転任して前後6年生徒、また学生として指導した形になっている。勿論此の間盛んに研究もし、また発表もしておられた。文理大卒業後教室に残つて研究を続けられたが、その研究範囲は中々広く、昆虫・蜘蛛・サソリ・コムカデ・爬虫・鳥・獣と行くとして可ならざるはない状態であつた。実に記憶力の優れた人であり、綿密な人でもあつたので強記博識、一寸私等は真似のできない有様で、加うるに筆の立つ人であり、漢字の知識も豊かであつたので、私の書いた文章や著書等は、その誤字やミスプリントをいつも親切に注意して下さつた。正直で不正をにくむこと人一倍であつたから私は度々叱られたものである。どつちが師だか弟子だかわからない有様だが、真心から私を思つての忠言であつたから私

はいつも感謝の気持でその忠言を受け入れていた。

白晝端麗な容姿でいつもにこやかに静かに話をされる様子は人をして耳を傾かせるものがあり、はじめの中は私の子供等はあの人西洋人などときいたものであつた。若い頃から風呂敷を愛用していつもそれに何かを包んで携帯しておられた。折鞘等を持つていたのは見たことがない。普通の学生とは一風変つていて或る人等はあれは変りものだよといつていたが、こういう変りものなら大歓迎である。

研究ももとより指導の方も実に懇切丁寧であつたようで、文理大におられた時すでに付属中学の生徒で昆虫好きの連中がたくさん集つてきていた。色々の集会の司会等実に巧妙であつてこれも一寸真似のできない点である。話の仕方は低音で平々凡々のようであるが奇妙に人をひきつける魅力があつて種々の会の司会を度々やつておられた。また種々の学会の創立や世話にも大いに力を尽されたのであつて、此の昆虫学会でも1954年以來ずつと評議員であり、40周年記念の時には昆虫総目次の出版に骨を折られまた展覧会にも大いに活躍された。また度々幹事とか会計監査を勤められたが、これは一面事務的乃至行政的方面にも優れた才能のあつたことを示している。動物学会や鳥学会や動物分類学会等にも一方ならず骨を折られたし、東亜蜘蛛学会等にとっては再生の恩人といつてもよい位である。大東亜戦争のあの困難なさ中に用紙の確保、会の存続等について格段の努力をなされたのである。最近では博物温古会や爬虫類談話会の創設にも関係しておられたが、とにかく私等は高島君にまかせて置けば万事うまく事が運ぶし間違いがないので安心していたのである。失礼な申し方だが便利で重宝な人であつたから次第に色々な方面から利用される傾向がありテレビやラジオに引っぱり出されたりして可なり忙しい日常ではなかつたかと思われる。あるいはこれらの過労がわざわざいしたのではなからうかとも思われる位である。また同君は著書もたくさんあり特に動物渡来物語等は一寸他の人では書けないと思うようなものである。著書ができる度に恭呈と記して贈つて下さつたが、その著想や筆力にはいつも感心していた。

私が小石川白山上にいた頃、東洋大学の門側に父君の高島米峰氏が本屋を開いておられた。私には用のない本が大部分であつたから入つて見たことは殆んどなかつたが、高島君の御岳父や母堂にもお目にかかつたことがある。同君は自分の家の事や家族の事は何も語られない人で、こちらもきゝもしなかつたが、悪友達は高島君のお嫁さんにはどんな女性が選ばれるだろうかと噂をしていたようである。どこからでた話か知らぬが、花井蘭子のような人が好きだと本人がいつたとやらで騒がれたこともあつたようである。いたづら半分冗談半分ではあるが、悪口をいつたりいわれたりしてきたが、とにかく誰にも信頼され好かれる人であつたことには間違いがない。55才といえば人生50は過ぎているが近頃長生きするようになったので、此の年では若いといつてもよい位である。もう20年や30年生きてもらいたかつた。何としても惜しい。どうにもならないことであるがあきらめ切れないものがある。嗚呼。